アートが建築物に作用する効果について
－大黒屋・脱皮する家・光の館を事例として－

日大生産工（院）　○高橋　佳祐　　日大生産工　田中　遵
日大生産工　日高　單也

1. 序論
1-1. 研究の背景と目的

時代の変化により、ある目的の為につくられた建築物が空き家になる等、存続が困難となってきているものが少なくない。これに対し、新たに建築物の存続への糸口が期待されており、方法の一つとして、アートを取り入れた事例が存在する。栃木県那須塩原にある「板室温泉ホテル大黒屋」（以降、「大黒屋」とする）は、「保養とアートの宿」としてアート作品を宿泊施設に取り入れている。また、新潟県越後妻有地域の越後妻有アートトリエンナーレで公開されている「脱皮する家」は、空き家だった民家を用いてアート作品としている。そして、同じく越後妻有アートトリエンナーレで公開されている「光の館」は、アートと宿泊施設を融合させている。本研究ではアートを建築物に取り入れているこれらの事例において、アートによって建築物にもたらされた効果を分析する。

1-2. 研究の構成

本研究は、「アート」を芸術的概念とし、「アート作品」を具体的作品として扱っている。アートと建築物の関連性の研究は、使用されなくなった建築物や、そのおそれのある建築物を再生・活性化する上で応用できる可能性を持っていると考えられる。

本研究の構成として、まずアートを建築物に使用している例として大黒屋・脱皮する家・光の館の３つの事例に対し、文献調査・現地調査を行い、アートを取り入れるに至った経緯を把握する。次に、アートが建築物に及ぼした影響をさぐるため、文献調査・現地調査を行い、３つの事例の現状の把握・分析を行う。そして、導きだされた分析を基に、アートが建築物にもたらした効果を分析・考察する。

現地調査について、大黒屋は 2008 年 8 月に行い、脱皮する家、光の館は 2007 年 8 月に行っている。

2. アートを建築物に使用した経緯と現状
2-1-1. 大黒屋の歴史的背景の把握

栃木県那須塩原市の板室温泉にある大黒屋は、創業 1551 年の宿泊施設である。1966 年に名称が「板室温泉ホテル大黒屋」となり、1986 年に 16 代目オーナーが大黒屋を継いだ後、「保養とアートの宿」をめざし現代アートの作品を宿泊施設に取り入れるようになる。

2-1-2. 大黒屋の現在の状況把握と分析

現地調査を行った 2008 年 8 月現在において、大黒屋はアート作品が廊下、庭、客室、ロビーから厨房まで、宿泊施設全体に設置されている。また、アート講座や作家の個展等のイベントも催している。このことから、宿泊施設全体にアートを取り入れることで、従業員、宿泊客等の大黒屋に関わる人々とアートの距離感を縮めようとする意識がうかがえる。また、イベント等の交流により宿泊客はアートへの意識が高まると考えられ、大黒屋からアートを発信していこうとする意識がうかがえる。これは現地調査を行った 2008 年 8 月の時点において、大黒屋が収集したアート作品の増加に伴い、作品の保管・公開を目的とする蔵の美術館

Effect that art acts on Architecture
－ Case of Daikokuya, Shedding House, House of Light －

Keisuke TAKAHASHI, Mamoru TANAKA, Tanya HIDAKA

を新設したこと、公募で大黒屋アートコンペを開催し、新しい作家の発掘・育成に取り組んでいることからもうかがえる。

大黒屋のアートの取り入れ方の特徴として、図１のような抽象的な作品を中心にそろえており、それを建築物に反映させていることがあげられる。これは大黒屋の施設環境に反映できるようなアート作品を選んで設置することで、大黒屋の持つ伝統や地域の風土を継承しつつ、独自の宿泊施設の雰囲気をつくり出していると考えられる。

アートを取り入れた効果としては、大黒屋オーナーへのインタビューより[注1)]、宿泊した客は再び来訪することが多く、アート作品を取り入れることで生まれた大黒屋独自の施設的特徴が、人々を惹きつけていると考えられる。内部空間において、廊下は図２のように壁掛けの作品を一定間隔で展示している。これにより、大黒屋オーナーへのインタビューでは[注1)]、以前まで客室はロビーから近い場所が好まれていたが、アート作品設置後は奥の客室を好む客も増えるようになったと言われている。これは、廊下の作品を鑑賞しながら歩く流れが生まれることで、奥の部屋に移動することの手間を解消していると考えられる。また、現地調査より[注2)]、従業員が宿泊客を部屋まで案内するときの会話内容が移動するときに見ることができるアート作品に関することが多く、他の宿泊施設と比べて案内時の会話に差異がみられた。これは、宿泊客が移動中もアート作品を鑑賞できることで、従業員とのアートに関する交流が生まれているといえる。外部空間において、図３のように、庭や外壁、庇、別館との間等、大黒屋の敷地内に作品が点在して展示されており、宿泊客が外へ出てアート作品を鑑賞するための散歩を促す工夫が見受けられる。そして、それらの作品が、宿泊施設内部から作品が見えるようにしている工夫もうかがえる。大黒屋の地域環境は川や温泉街などがあり、その風景に宿泊客の目を向けさせることや、地域環境に馴染むようなアート作品の設置を意識していると考えられる。

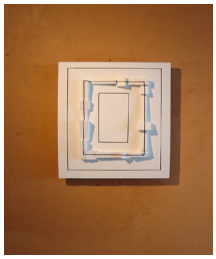
図 1. 大黒屋にあるアート作品

図 2. 廊下に設置されているアート作品

図 3. 屋外に設置されているアート作品

2-2-1. 脱皮する家の歴史的背景

対象となった民家は築 150 年を越えており、また、越後妻有地域の過疎・高齢化等の要因により、空き家として放置されていた。その後、この空き家は 2006 年の第３回越後妻有アートトリエンナーレ・大地の芸術祭で行われた「空家プロジェクト」で、日本大学藝術学部絵画学科彫刻コース有志により、作品「脱皮する家」として公開された。脱皮する家は、図４のように空き家の柱や壁、梁、天井、床等の内部空間を彫刻刀で彫っていくことで民家自体をアート作品としている。

図 4. 脱皮する家

2-2-2. 脱皮する家の現在の状況把握と分析

脱皮する家は 2006 年８月の第３回越後妻有アートトリエンナーレ・大地の芸術祭以降もアート作品として公開され、作品管理はこの作品を購入した個人オーナーにより行われている。その後、2008 年８月に民宿となり、一般

の人々が宿泊できるようになっている。また、日本大学藝術学部の人々により毎年数回イベントが催され、地域住民や他地域の人々と交流を図っており、脱皮する家からアートを発信していこうとする意識がうかがえる。公開中は地域住民も鑑賞者に対し脱皮する家の案内をしており、地域でアート作品を守っていこうとする意識やアートへの関心等がうかがえる。

脱皮する家のアートの取り入れ方の特徴として、民家の柱や壁、梁、床、天井等既存の部材に対し、彫刻刀で彫るという表現を行っており、既存の民家の形態や伝統を継承しつつ、脱皮する家独自の空間をつくり出していると考えられる。

アートを取り入れた効果としては、空家プロジェクトによってアート作品「脱皮する家」兼宿泊施設として生まれ変わり、空き家が再生されていることや、当初の「住む」という用途の他に、「鑑賞する」という新しい用途が増え、鑑賞者、地域住民、作家、オーナーとの間にアートに関する交流が生まれていること等があげられる。

2-3-1. 光の館の歴史的背景

図５の光の館は越後妻有アートトリエンナーレ・大地の芸術祭の総合プロデューサーである北川フラムの要望で、ジェームス・タレルによりつくられた。そして 2000 年にアート作品として第１回越後妻有アートトリエンナーレ・大地の芸術祭で公開された。光の館は瞑想のためのゲストハウスとして構想され、越後妻有地域に存在する重要文化財である星名邸がモデルとなっている。この施設は、越後妻有地域の風土様式を反映し、光を知覚するさまざまな仕掛けが施されたアート作品兼宿泊施設である。

図 5. 光の館

2-3-2. 光の館の現在の状況把握と分析

光の館は宿泊できるアート作品として運営されており、新潟県庁や十日町市のホームページにおすすめ観光スポットとして紹介されている。このことから、地域や県で光の館を支え、発信しようとする意識がうかがえる。

光の館のアートの取り入れ方の特徴として、新築する段階から建築物自体がアート作品となるよう考えられており、建築物とアートを融合させていると考えられる。そして、越後妻有地域の風土に合った建築様式でつくられていることから、地域の伝統や風土を継承しつつ、光の館独自の空間をつくり出していると考えられる。

アートを取り入れた効果としては、まず、新潟県庁[注3)]より、2000 年の公開以降、ほぼ無休の状態で宿泊施設として利用されており、夏期や連休等では予約が困難な状況で、日本国内や、海外からのリピーターも多い状況がみられる。このことから、宿泊することで作品に惹かれた人が多く存在すること、作品の特徴や評判からも、光の館は国や地域を問わず人気が高いことがうかがえる。また、作家の表現する作品空間が、「昼と夜、西洋と東洋、伝統と近代を対比すると共に融合する試みである」として[注4)]、新日本様式協議会より「新日本様式 100 選」に選ばれている。このことから、光の館のようにアートを建築物に取り入れることが、生活文化への新しい試みであるとして社会に認められつつあると考えられる。

3. 考察

本研究ではアートが建築物に作用する効果について調査・分析を行った。その結果を以下にまとめる。

大黒屋は、大黒屋に合うアート作品を選んで設置することで、大黒屋の持つ伝統や地域の風土を継承しつつ、独自の施設的特徴をつくり出していると考えられる。また、宿泊客の意識を外に向けさせ、板室温泉の自然を感じさせる工

夫がみられた。アートを取り入れた効果により、大黒屋独自の雰囲気が生まれ、宿泊客の多くが再び訪れるほどの人気を得ていること、各宿泊室の利用頻度の差が解消されていること、宿泊客と従業員との間にアートを介した交流が生まれていること、宿泊客のアートへの意識が高まること、大黒屋からアートを発信していく意識が生まれていること等があげられる。

脱皮する家は、既存のものを利用しアート作品とすることで、既存の民家の形態や伝統を継承しつつ、脱皮する家独自の施設的特徴をつくり出していると考えられる。アートを取り入れた効果により、アート作品兼宿泊施設として再生されたこと、脱皮する家やイベント等を介して鑑賞者と地域住民、オーナーとの間に交流が生まれていること、地域でアート作品を守ろうとする意識や、アートへの関心が生まれていること、脱皮する家からアートを発信していく意識が生まれていること等があげられる。

光の館は、建築物とアートを融合させ、また地域の風土様式でつくることで、地域の伝統や風土を継承しつつ、光の館独自の施設的特徴をつくり出していると考えられる。アートを取り入れた効果により、光の館が日本や外国を問わず人気が高いこと、宿泊客同士にアートに関する交流が生まれていること、地域や県でアート作品を守ろうとする意識や、他地域に光の館を発信しようとする意識が生まれていること、光の館のようにアートを建築物に取り入れることが生活文化への新しい試みとして社会で認められつつあること等があげられる。

３つの事例に共通することとして、地域の伝統や風土を継承しつつアートを取り入れていることがあげられる。また、アートが建築物に作用することで、独自の雰囲気や空間をつくり出し人々を惹きつけていること、アートに関するコミュニケーションが新たに発生していること、他地域にアートを発信していこうとする意識があること等があげられる。そして、アートが建築物に作用することにより、建築物に関わる人々が、アートについてもっと身近になるきっかけをつくっていると考えられる。以上より、アートは建築物の存続活性化につながる効果を持っていると考えられる。

4. まとめ

本研究より、アートが建築物に作用する効果はいろいろ見られた。３つの事例ともアートの規模や利用方法は異なっているが、他の施設にみられない目的を持っており、それを基に地域の伝統や風土を考慮しアートを取り入れていると考えられる。それにより生み出される効果が、建築物の再生・活性化につながると考えられ、人々を惹きつける要因となっていると考えられる。これは、再び訪れる人々がおよそ７割にのぼるという大黒屋オーナーのインタビューからもうかがうことができる[注1)]。

今後の研究として建築物の存続活性化につながるアートの種類、設置方法、目的、テーマを明確にし、建築物を活性化させる方法を見いだせることが出来れば、他の使用されなくなった建築物や、そのおそれのある建築物を復活・活性化するために応用できると考えられる。

注

1）荒木晋作、高橋佳祐、田中遵：ヒアリング調査資料、2008.8
2008 年 8 月 12 日に大黒屋オーナーへのヒアリング調査を行った。

2）荒木晋作、高橋佳祐、田中遵：現地調査資料、2007-2008
2007 年 8 月 20 日から 2007 年 8 月 22 日にかけて、脱皮する家、光の館の現地調査を行い、2008 年 8 月 11 日から 2008 年 8 月 12 日にかけて、大黒屋の現地調査を行った。

3）新潟県庁ホームページ：http://www.pref.niigata.co.jp/

4）「新日本様式」協議会ホームページ：http://www.japanesque-modern.org